



〈研究〉ギディングスの観たる社會發達の方向

小松, 堅太郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 34(4):553-574

(Issue Date)

1923-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053542>



研究

ギディングスの觀たる社會發達の方向

小松 堅 太 郎

一 序 論

ギディングスは社會を合成社會と組成社會とに分類した。合成社會といふは地域の共同又は血縁による自然的團結にして全部或ひは又一部、出生に基づく集合 *genetic aggregation* より成る。比較的小なる合成社會、例へば群又は種族の如きは殆どすべて出生的群居に基いて成立するのであるが、比較的範圍の廣大にして人口の大なる合成社會例へば國家の如きは、出生に基づく社會の成員の混和 *congregation* によりて成立する。換言すればそれは征服による移住又は個人的移住による異族の合成である。故に出生のみに基く合成社會を同族社會又は種族社會 *genetic society* と云ひ其の混和によるものは異族社會又は庶民社會 *demotic society* と呼ばれて居る。種族的合成社會は、夫故に、血縁的類似に基いて成立する。其の成員は出生と同時に直ちに民族又は部族に屬する。然るに庶民的合成社會に於ては、血縁的類似を重視すれども、必ずしも之を必要條件となさず、寧ろ潜在的又は可

能的類似 potential resemblance を以て足れりとする。潜在的類似と云ふは現在心的に又は實行的に mental and practical 類似せずとするも、何日かは類似するに至るべき可能を包含するもの、即ち潜在的に存する類似が現實の上に浮び出づることの可能なるものを云ふのである。例へば征服國家の成立當初は異族の合成なるが故に、現實に血液並びに文化内容の差異のみが著しく注目せらるゝのであるが、これとても、其の後に於て血液の混和、言語の一致、風俗習慣又は宗教等の模倣行はれて同化を生ずる點より見れば、そは初めより潜在的類似の上に立てるものと見る事が可能なのである(註一)。要するに合成社會は一言で云へば自然的紐帶により同類親和を中心として成立する社會である。(Giddings, Principles of Sociology p.153; Descriptive and Historical Sociology, P. 433)

(註一) 潜在的類似の如き概念は詭辨的なりとの非難あるも、今は其の問題に觸れぬ。ギディングスが類似といふ事を説くは畢竟、類似せる者は相愛著すと云ふ圖式的觀念に出發點を置くがためである。

組成社會は或特殊の目的を達せんがために、組織せられたる結社である。故に之を目的社會とも呼ぶ。而して又斯かる目的を達成せんがためには、一定の機能を行はねばならぬ點より見て之を機能社會とも呼ぶ。各組成社會の行ふ機能は特殊化せられ、相互に相異なるが故に、各社會は相互補充の關係に立たねばならぬ。これ一種の社會的分業である。而して組成社會の夫れ夫れの機能を營み分業の關係に立てる姿即ち社會組成 social constitution である。組成社會に於ては、成員の心的又は實行的類似が要求せられる。蓋し共同の目的に向つて協働する成員は、達成すべき目的に關心的類似を必要とし、機能の遂行に於て實行的類似が必要であるからである。従つて合成社會に於け

るが如く血縁的類似又は潜在的類似を必要としない。一結社の成員が心的又は實行的に類似すると同時に各組成社會相互の間には差異の存すること前述の如くであるが。此の點又合成社會と異なる。成立せる各合成社會相互は自から類似するが故である (Principle, p. 171; Descriptive, pp. 433, 501) 従つて組成社會の場合の如く、其の間一般的に分業の成立し得ざるは言を俟たぬ。

二 合成社會擴張大縮少の法則

上述の如くギディングスは合成社會に就いて種族社會と庶民社會とを區別したる後、先づ種族的合成社會の過ぎ來れる徑路を辿り、然る後庶民的合成社會の歩める道を觀察し、如何に合成社會が一方に於て擴大の方向をとり、他方に於て縮少の方向をされるかを見ると同時に、將來に於てそは如何なる徑路を辿るべきかに關し、興味ある見解を示して居る。

種族的合成社會は家族、群、部族及び部族同盟の如きものである。複数の家族結合して群をなし數群又團結して部族をなし、更に又數部族合同して部族同盟をなして居る。なほ其の間に血縁團體としての氏族が介在して、部族其の他の團結に特種の意義を有せしめた。

最も單純なる合成社會は家族である。家族にあつて其の最も單純なる形態をとるものは、短期間内に限り同棲する一對の伉儷である。例へばアンダマン群島に住めるミンコビに於ては、父は其の子の離乳する迄母と同棲し、其の期至れば母子を残して去り、他に妻を求める。同棲の期間稍々永きに亘るもなほ終世的結合をなさざるものは濠洲のブラック・フエロー、グリーンランドのエスキ

モ、ブラジルのアマゾン、インディアン等に見られる。以上のものと異り稍々複雑なる形態をなすものは、一妻多夫及び一夫多妻の家族である。既に文字其のものが示すが如く前者に於ては一人の妻と數人の夫とが結合して一家族をなし、後者に於ては反對に一人の男子が數人の妻妾と同棲する。吾人にとつて最も奇異なるものは、瓜哇に於けるビユナルア家族である。そは一團の兄弟と之と同胞ならざる一團の姉妹との婚姻であつて、各婦女は總ての男子の妻となり、各男子は總ての夫となる。斯く原始に於ては家族の形態は一樣でなく、且つ不定的なものであつたが、文化漸く進むにつれて一夫一妻の家族は、一夫多妻又は一妻多夫の家族を斥くるに至り、其の形態も固定的となつた。(Principles, pp.155-156.; Descriptive, pp.441-442)

然るに更に數個の家族は結合して群をなし、少きは二十五人より多きは百人の成員を有するに至つた。ミンコピは三四十人一團となつて移住するのが常であつたし、ブッシュメンは十人乃至五十人、時に或ひは百人を數ふる人々が群をなして流浪の旅を續けた。フュージアン又數家族の合成になる群を構成し、三四十人の成員を有して住んで居た。初め群とは結合することなかつたとは云へ而も絶對に孤立して生活することなく、同種族、同一言語又は文化内容を有する類似の群間には能く交通が行はれた。又屢々恐怖に襲はれ、或ひは豊富なる食物の分配のために、時に又移住のために群と群とは一時的に集合することもあつたが、併し初めに於ては彼等は首長の統制の下に緊密なる團結をなすことは殆どなかつた。(Principles, p.150. Des.;criptive pp.451-452)

後來説くが如く、其の後に至つて群は結合して部族となるのであるが、今故意に此の點を回避し

て、先づ氏族の形態に一瞥を投ずる。氏族は純然たる血縁團體であつて、群又は部族の如く血縁又は地縁の兩紐帶によつて團結せるものは自から異なる。氏族には二種の形態がある。一は母系氏族で、他は父系氏族である。母系氏族とは祖先たる母より其の女兒女孫と云ふが如く、女系を通じて血族の範圍を定むるものを云ひ、父系氏族とは男系を通じて血族範圍を定むるものを云ふ、母系氏族は其の名稱を或種の植物又は動物の如き自然物より藉り來る。斯かる自然物は女性にして、之より其の團體が生起したるものと一般に考へられて居る。學者之を呼んでトローテムと云ひ、從つてかゝる氏族はトローテム族と名づけられる。而してトローテム族の成員は族外婚を行ひ、同一氏族内の男女間の婚姻を禁じ、トローテムを異にする男女の結合のみを許し、而も斯かるトローテムを有する成員は事實上血縁あると否とに拘らず、相互に兄弟姉妹と考ふるが故に、そは夥しき數に上り、龐然たる大團體を構成したりしことは想像に難くない。而して斯かるトローテム族の成員は一地方の各群に亘つて散在し、一地方の各群は種々の氏族の成員を含み、群及び部族の團結の有力なる紐帶をなしたことは贅言を要せぬ。父系氏族も亦略々類似の情況にあつたこと、思ふ。(Principles, pp. 158-160, 272 Descriptive, p. 453)

原始蠻民に於ては群又は氏族の内部の團結は自から外部に對する反感となり、結合と分離とは楯の兩面をなし、前者強ければ從つて後者も亦強く、外敵に對する反感高まるに從つて内部の結合は愈々緊密の度を加へた。かるが故に始めに於ては群間の交通は行はれたるも、未だ相互の團結を齎すに足らず、一時的集合あるも一社會をなすに至らなかつた。然るに外敵の壓迫日に加はり、不斷の爭鬭の狀態現出すれば、勢ひ外部に對する敵愾心は漸次強烈の度を加へ、氏族によつて血縁關係

を取得したる數群は茲に團結を形成するに至る。これ即ち部族である。然し乍ら部族は敢て一氏族の血縁者のみを含むに限らず、二以上の氏族の成員を包括するに妨げぬ。これ前述の如く各群の成員は數氏族に屬すると、又部族は地縁團體なるがためである。又部族的團結は單に外敵の壓迫のみによるに非ず、洪水、火災、旱魃、冬籠又は植物の分布に於ける變化も亦自から團結を助長し來る團結久しうすれば愛著從つて生じ、一地方の食物にして全成員を支ふるに支障なければ、彼等は愛著そのものために強靱なる結合をなすに至る。而して部族の團結強固を加ふるに従つて、成分たる群は獨立の存在を失ふ傾向を示して居る。(Principle, pp. 158, 160, 273-274; Descriptive, pp. 401-402.)

部族の成員増加して其の形態も大を加ふれば、それは數個の新たな部族を派生せしめる。然る時は各氏族に屬する成員は各々新部族に分屬せしめられる。斯くして同一氏族の成員は總ての部族を一貫して存するに至る。而も又各々の派生部族は同一方言を用ひ、共同の血縁に基く傳統を維持することによつて、共通の社會意識を發達せしめ、遂に一母系民族 *metronymic folk* となる。社會意識發達し、部族間又は氏族間の血縁關係意識せられ、從つて同一民族たることの自覺起るに至れば社會の合成に一段の進動を生じ、他種族の壓迫等の事情協力するに及んで、數部族は茲に一大軍事的、政治的團體を構成するに至る。これを稱して母系部族同盟と云ふ。(Principles, pp. 158, 284; Descriptive, p. 462.)

以上小家族より部族同盟に至るまでの合成社會擴大の傾向に關する概觀は主に母系族に就いて爲されたるそれであつた。更に又吾人は父系族に就いても同種の傾向を看取することが出来る。而も母系族より父系族に轉化することによつて、種族的合成社會の擴大に更に一步を進めた。父系族成

立の原因は主として掠奪婚、賣買婚又は夫妻及び子女の母系族よりの脱走これである。母系族に於ては概して夫は婚姻の成立と同時に妻の血族と同居し、従つて其の子女は母系族に於て養育せられ且つ其の名を承繼した。然るに掠奪婚行はれ、妻が夫によりて掠奪せられたる場合は事情全く之と異り、妻は夫の家に棲み子女も従つて父によつて養育せられ、且つ父の姓を取得した。而して父にして妻又は子女を繼續して其の下にあらしむる限り、家系は男子男孫を通して維持せられ、茲に父系を中心となせる父系氏族なるものを生ずる。之と多少事情を異にする場合例へば夫が妻の家に入る場合に於ても、夫が其の妻又は子女と共に母系族を脱出することによつても父系族が起り得る。これ父が母又は子女の上に事實上の力を行ひ得るからである。賣買婚にあつては夫は以上二つの場合よりも一層強大なる權力を妻の上に執行し得た。何となれば、其の權利は最早や妻の血族によつて拒絶せらるべき何等の理由もなく、常に正當のものであるからである。(Principles, pp. 285-289; Descriptive, pp. 462-463)。賣買婚の成立に有力なる幫助を與へたるものは牧畜であつた。牧畜は單なる狩獵と異り、財の蓄積により男性的野心 *masculine ambition* ——學者の所謂力の欲望——を満足せしむるに與つて力あつたがために、牧畜民は競つて之を行ひ、富を増加せしむることに腐心した。其の結果牧畜業に必要なる牧人を得んとし、専ら之に賣買の結果得らるべき妻子を充てんとし、茲に賣買婚が行はるゝに至つたしのかのみならず、當時男子は多く戰場に出で、干戈を執るがため、勢ひ農耕は妻女をして行はしむるの必要に迫られた。斯くして起りたる賣買婚は遂に、夫又は父をして強大なる權力を其の妻又は子女の上に執行せしむるに至つた。茲に於てか父系氏族確立せらる。(Principles, p. 288)

掠奪婚、賣買婚と協力して父權を優勢ならしめたるものは、祖先崇拜の事實である。父權は祖先崇拜なる一宗教的様式と握手することによつて、其の家族的團結の度を増し、氏族及び部族の形態を變形せしめた。氏族又は部族の成員は家の建設者たる祖先に異常なる崇敬の念を以て對し、他界せる後も永く其の靈を祭るを常とした。又彼等は祖先の靈が彼等に庇護を與ふるものと信じ、總ゆる犠牲を捧ぐることを辭しなかつた。斯くして祖先崇拜が父系族の重要な信仰たるに至れば、それは又族長職の世襲を容易ならしめた。これ蓋し偉人の男系の男子は祖先の職權の最も適當なる承繼者なりと考へられ、父の靈は子の行動を監視し、超自然力を以て其の子を幫助するものと一般に信ぜられたからである。なほ又父系族の母系族よりも其の團結に於て強靱なりし所以は、子に對する權力は、母系族に於ては母の兄弟又は伯叔に存し、其の統制は不安定にして、責任の歸着點は數人に分配せらるゝに反し、父系族に於ては父の單一なる權力の下に統轄せらるゝの便ありしがためである。(Principles, pp. 290-293; Descriptive, pp. 64-68)

父系部族確立し首長職又世襲となるにつれて、權力服従の關係により社會の團結は愈々緊密の度を加へ、血統的紐帶は以前の如く重視せられざるに至る。而して首長の富増大すれば其の權勢頓に加はり、茲に階級を派生し、彼等は貴族となり以て多數の成員を統制する。茲に於て平蠻民對建國 barbaric feudalism なるものが出現することゝなつた。蠻民封建國は大部分部族の特色を變形し、血縁關係を無視して専ら忠誠なる臣民を得て之と主従の關係を結び、其の臣民の敢て同一部族に屬する否かを問はざるに至つた。(P. pp. 293-296; D. pp. 409, 472-473)

母系部族が同盟を構成したるが如く、一定の地域内に住せる父系部族も亦力の欲望に驅られ、又は共同の敵に對抗する必要より、軍事的同盟を結成した。而も後者は前者よりも遙かに強固に、遙かに優勢に又遙かに安定的繼續的であつた。父系部族同盟は所謂民族的團結であり、別言すれば國民的團結であつた。同盟の最高權者は軍事、宗教、司法等の諸權力を一身に集め、所謂國王たるに至つた。學者の所謂族制國家 *ethnic nation* 即ち之である。(P. pp. 296-297; D. p. 473)

上來述べ來れるが如く、一部分封建化せられ、又部族同盟又は族制國家の出現を見たる種族社會は茲に變動の機會を招來するに至つた。社會人口の増加するに及んで、彼等は秩序ある農耕に依存するの必要を痛感せざるを得なかつた。併し乍ら是等の種族は一方自ら農耕に従事するを欲せざるが爲め、他方鬱勃たる野心のために(註二)團體的移住を試み、他種族の征服の結果獲得せる領土の上に永久の故郷を定めた。斯くして被征服種族は農耕に従ふことを強制せられ、而も土地そのものは支配階級たる征服者之を領有し、被征服者は單に耕作を爲すに過ぎざるが故に、後者は唯奴隸として勞役に服し、生産の結果は自己の僅かなる食料を外にしては、全部征服者の懷中に入るこゝとなる。茲に於ては綏取行はれ、征服國家成立するに至る。(P. pp. 309, 313, 315; D. pp. 473-474)而して斯かる征服國家は異種族の合成により成立する點より、ギディングスは之を異族社會(*demotic society*)と呼ぶこと前述の如くである。

(註二) 原始蠻民は勞働を嫌惡せるに非ず、寧ろ之を好愛したりとの説がある。故に勞働を離れて征服の事に従ひ、以て綏取を行ひたるは單に力の欲望に促がされたるが爲めであるとの反對を免れぬ。併し此の點に就いて私は深く立ち入る資格を

有せぬ。今後の研究に俟つ所なければならぬ(高田博士著 社會學原理四一四頁—四一八頁參照)。

斯かる社會に於ては最早や以前の如く同一血縁に基く團體を構成することは不可能となるのであるが、征服國家は必ずしも種族的統一の思想を全然捨つるに非ず、彼等は異族の交婚による新種族的統一を成就せんことを試みる。ギディングスは之を同類意識の擴大と呼ぶ。而も彼等の重心はなほ之を以て足れりとせず、更に征服の點を進め、茲に二重又は三重に異族の合成行はれ、而も交婚と同化とは能く種族的定型を作るに至つた。(P. pp. 311, 322-323)

茲に眼を轉じて私は庶民的合成社會に於ける家族形態を見たい、先きに種族社會に於ける家族は結合して群をなし、群が團結して部族をなせる跡を尋ねた。然るに庶民社會生れ父系族の勢力盛になるにつれて、かの小家族たりしものは漸次膨脹して、遂に家長家族なるもの出現するに至つた。

父系氏族に於ては妻は夫の家に入るが故に氏族と部落とは一致し、社會は益々安定的なるものとなり、一地域に住する血族は能く緊密なる團結を維持することが出來た。羅洲諸民族又はアリアン民族の初期に於ては、家長家族は社會合成の單位をなして居た。ギディングスによれば家長家族は共同祖先を有する五代の家族を包括し、五代の終に於て家産は分割せられ、相續權ある各男子は新家族の祖先となり、再び五代の家族を統制し、又共同防衛の爲めには七代乃至九代の血族が一團をなすことすらもあつたと。併し乍ら私は斯く長期に亘る世代の成員一團となることの可能なる所以を考へることが出來ない。そは蓋し誇張の敘述であつて、事實は三四代の血族を包括したるものと解するを妥當なりと信ずる(高田博士著前掲七七五頁參照)。又家長家族は他の離散せる家族又は征服者の如

き血縁關係なき者をも其の勞役の利用のため、又は養子縁組の方法によつて其の家族と共に止まることを許した。而して家長は其の家族中の最年長の男子であつて、絶大の權力を振ふことが出来た。(D. pp. 180-182)

斯く庶民社會に於ては一方家長家族が勃興すると共に、他方從來の部族は漸く凋落の悲運に際會することゝなつた。其の崩解の原因としてギディングスの示すものは、都市の勃興と交易の隆盛とである。勿論都市と云ふも近世のそれとは著しく其の趣を異にし、其の初めに於ては禮拜と避難の中心地として存在の意義あるに過ぎなかつた。即ち部族の人々は遠近より定時に行はるゝ祭禮に於て、其の神に捧ぐる供物を携へて此の聖地に集まる。聖地は城廓を以て圍まれ、且つ王及び法官等の法廷を開いて待つゐるがために、危険に嚇やかされたる人々は來つて保護を覓める。又部族長、僧侶、軍司令官等は此處を永住の地となし、自らの保護及び秩序維持の必要より近衛の軍隊を駐屯せしめた。其の他職工等は寺院、堡壘の建設並びに修繕のため、又は甲冑其の他の武器の製造のために集まり来る。斯く牧畜又は農耕の如き生産的仕事より離れたる人々の集合は、必然的に日用品の供給を他より仰ぐの止むを得ざるに至らしめる。茲に於て物々交換起り、定期的祭禮に於て各氏族又は部族の人々は集まつて家畜、穀物、果實、金屬、織物、器具、鹽、油、飲料其の他の物を持ち來つて互ひに交換する。祭禮は正に宛然市場の觀を呈した。斯くする間に市場の公開は頻繁となり、移住者又激増して都市の人々は倍加し、市場又日毎に開かるに至つた。而も交換の媒介たる貨幣一度現はれ、商人階級の發達するに及んで、商業の中心地は他部族の人々を吸収するが故に、

茲に從來のさまでに強き部族的團結は漸く弛緩し、結合の紐帶は他の方面に現はるゝこととなつた。

しかのみならず征服國家の出現は地方的に割居せる小社會の機能を吸収すると同時に、以前の如き部族間の不斷の爭鬭を終結せしめたる結果、内部の團結は漸く減耗するに至つた。(P. pp. 317-319, 383.)

斯く合成社會に於ては一方に於て小社會は大社會のために吸収せられ、小家族より群、部族、部族同盟、征服國家といふが如く漸次擴大の方向に向ひ、而も近時の國際關係は各國家間に無限に錯綜せる紐帶を織出し、時に世界を舉げて一大社會たらしめんとしつゝある(P. p. 406)。然るに他方に於ては部族先づ軍陣の血祭となり、氏族又滅び、一夫一妻の小家族は瀕死の病狀に餘喘を吐く。家産及び信仰維持のために個人の要求を極度に無視したる religious-proprietary family は既に浪漫家族に苦もなく一蹴せられて、今や家族は男女の自由戀愛の満足の場所と變じつゝある。而も個人的要求は愈々強く、男女の不定なる感情は遂に最後の牙城たる家族を解體して顧みない。のみならず婦人の經濟的獨立は此の傾向に更に油を灌ぐ。近年離婚數の激増は正に之を證明する(P. pp. 350, 352, cf. Bogardus, Introduction to Socio-logy, pp. 63-69)。右の如く合成社會は一面擴大の傾向を示すと同時に、他面縮少の徑路を歩むのであるが、其の擴大及び縮少は常に中間社會の萎縮に於て行はれる。ギディングス又這般の事象を道破して曰く、崩解なければ擴大なく、古き結合の分解なくしてより大なる新結合の成立は不可能である(P. p. 383) (註三)。

(註三) 學者は此の傾向を概化して社會の結合分離進行の法則と云ひ、又心的因子の方面より觀て結合定量の法則と稱する

なほ一言すべきは、ギディングスが合成社會擴大の傾向を其の主觀的方面より觀察して、同類意識の擴大と社會の擴大とは相即するものであると云ふことである。同類意識とは曾て述べたるが如く、ギディングスによれば同情を意味するものであるが、同情には氏の覓ひるが如き社會構成の力を含まざるが故に、吾人は之を愛著と解する。然れども此の點は姑く置いて問はず、今假にギ氏自身の見解に従つて同類意識を以て類似の知覺、即ち同類たることの認知と同類親和（氏は同情と云ふも非なり）とであるとすれば、同類意識の最も狭き場合は家族又は群以外に及ばず、稍々廣がれば氏族又は部族に及び、更に擴大して族制國家の成員全部が相互に同類と認め且つ親和する。而してそは又更に征服國家の上に伸張して異族の同化行はれ、遂に全人類に及ぶに至るのである。斯くの如く社會の擴大は常に成員の愛著に裏付けらるゝものとするならば、家族的團結より解放られたる個人は直ちに、人類に對して愛著するものと謂ねばならぬ。學者は此の事象を呼んで社會せ原子化と云ふ。

三 組成社會發達の傾向

合成社會と等しく組成社會も亦種族社會と庶民社會との兩社會に於て成立し得る。而して種族社會に於ては組成社會は殆ど合成社會より分化するに至らず、合成社會の成員は同時に組成社會の成員として種々の機能を營んで居た。別言すれば此の種の組成社會は血縁者の範圍を出づることなく之に制約せられて其の上に成立した。斯くの如き事情にある時其の社會をギディングスは合成組成

社會 component-constituent と呼ぶ。之に反して庶民社會に於ては最早や合成社會既に異族の合成に基くものなるが故に、勢ひ組成社會も亦血族的基礎にのみ依る能はず。而も庶民社會は種族社會よりも其の人口に於て遙かに大に、從つて又其の機能も複雑を加ふるが故に、到底合成社會の全成員が一團となつて總ての機能を遂行し得ず、茲に機能の放散行はれ、數種の機能に於て數個の組成社會が並存對立することゝなる(D. pp. 50-503)。

前述の如く種族社會は庶民社會よりも其の成員に於て少く、且つ其の有する文化も低級であつたがために、其の組成社會も亦從つて單純未分化の狀態にあつた。此の種の社會に屬するものは家政團體、household、氏族、フラトリー、部族及び部族同盟である。

家政團體は原始的機能社會である。其の成員は原始的家庭の成員と——全部ではないが——殆ど一致して居る。唯時として家政團體を組成する其の家族の成員は、他に住所を求めて去る場合あると同時に、又家政團體は他の家族の人々を成員として含む場合があり得る。家政團體は文化的及び經濟的機能を行ふ。食物の準備、衣服の調製、什器其の他の道具の製作をなす傍ら、子女の養育にも從事する。亞米利加インディアンの家政團體に於ては、五乃至二十の家族が一棟の長屋に住み、一人の主婦は團體の經濟事務を管理する。女子は土地の耕作に當り、男子は狩獵のため野外に赴く。而して前記の主婦は其の勞働を監視し、又それを強制することが出来る。斯くして獲られたる生産物は團體の共有に屬し、其の分配は主婦の監視の下に行はれる。殊に興味あるは日々の食事は其の料理の調製の後、主婦は各家族の必要に應じて分配することである。唯かゝる家政團體は單一家族

の組織する所ではなくして、それは集合家族か或ひは氏族の組成する所に係る。學者は之を家族共產體と呼ぶ。然らばかゝる場合單一家族は家政團體を爲さるるか。ギディングスは之が明答を避くるも吾人の見解を以てすれば、各個家族も亦一の家政團體たるに妨げなきものと信ずる。蓋し家政團體は飽迄も共產體たると同時に共同消費團體たる點に特色を有し、然る時は各個家族も又共產消費團體たる事を認め得るからである (P. 276, 277. 高田氏前掲七九〇—二頁)

家政團體に就いて特記すべきは、それは分業を生める點にある。即ち各族政團體はそれ／＼特殊の仕事に永く従事する間に一方の手藝に秀でる。最初各家族は自家用の器具を作る。然る時は家族が相互に異なるが如く技藝にも自から異點を生じ、従つて製作品の特長が著しくなる。而して此の差異が相互補充の關係に立つ時其處に分業が成立することゝなる (P. 278; D. p. 308) (註四)

(註四) 家政團體の貧富の差異が影響したる著しい結果は、家族形態の上に現はれたる差異である。即ち家政團體の經濟生活が貧弱なる時は一般に嬰兒殺又は一妻多夫制行はれ、裕福なる時は一夫多妻が行はれる。而して其の中間にあるものは一夫一妻の家族である中央亞弗利加又はポリネシヤの如く自然の環境の豐饒なる場所に住する部族の婚姻形態は殆ど一夫多妻である一妻多夫制は亞米利加インディアンの慣習であつた (P. 276)。

氏族に於ては其の機能は著しく増加した。故に機能の飽和點に達したものが氏族であるとすら云はれて居る。即ち氏族は統制的、法律的、經濟的、宗教的、娛樂的等の機能を營んで居た。法律的機能としては、婚姻又は養子縁組に關する諸規を解釋適用し、成員間の權利義務の關係を規制し又氏族内の犯人を所罰した。經濟的機能としては母系部族内の家政團體を監督し、又亞米利加土人間

にはビー・ボォと稱する協働一般に行はれ、家屋の建築の如き仕事に於ては男女能く協力し、男子は難澁なる仕事に、女子は輕微なる勞役に従つた。而して斯かる仕事が二以上の家政團體の協働により行はるゝ限り、それを統御するものは氏族であつた。此の他家政團體に於けるが如く氏族に於ても男子は狩獵に女子は農耕に従事し、時折男子は女子の仕事を補助するのが常であつた。なほ氏族に於ては交易が行はれた。原始蠻民は戰後其の獲たる戰利品の特長を見て交換をなすことの利を認め漸次平和の間に之を行ふに至つた。然し乍ら最初の交易の形態は贈與に過ぎなかつた。劣弱者が優力者と逢遭する機會に於て、前者が後者の寛恕を乞はんがためになさるゝ物品の贈與であつた。而も時經るに隨つて一方が他方の好む所を察して之を邊境に残し置き、他方も亦其の對價として他の物品を残して去る。又或時は一方は使を派して他方に贈與をなす。斯く形式は交易なるも、其の實質は弱者よりの強者の掠奪であり、強者へなす弱者の貢税に過ぎなかつた。斯かる最も原始的なる形式の交易は、部族成立前氏族——群によつて行はれた。然し部族成立後は同一部族に屬する氏族並びに同一氏族内の家政團體間又は個人間にも行はれた。而して斯かる交易を統制する者は法律的機能を營む氏族であつた (P. pp. 278-281; D. p. 506)

母系族の發達過程に於て氏族は益々膨脹して、遂に數多の氏族に分裂すれば、是等の氏族は兄弟氏族と呼ばれ、相互に團結してプラトリー phratry となる。プラトリーは兄弟氏族の利害關係に關し其の代表者となり、又相互間の婚姻を禁ずる。プラトリーは法律的統制の大部分を氏族をして行はしめ、自らは宗教的又は娛樂的機能を營んだ。宗教的機能としては葬儀を營み、娛樂的機能とし

ては同一部族に屬する二三のフラトリー間に於ける競技を行ふ事であつた (P. pp. 281-283; D. 506)

以上家政團體は主に經濟的組織であり、氏族は主として法律的機關であり、フラトリーは宗教的團體であつたが、部族は軍事的機能團體であつた。部族が一旦組織せられたる後は、争鬭は常に戦争の形式を採るに至つた。インディアン部族に於ては、或勇者が其の氏族の成員中より志願兵を募集し戰場に向ふ。戦勝せば氏族の軍事指揮官たる地位を覓める。二以上の氏族の軍事指揮官等は一の部族合議體を構成し、更に一人の最高司令官を選任する。合議體は氏族又はフラトリーの普通事務に干渉せず、唯其の部族と他の部族との間の關係のみを處理するものであつて、云はば參謀本部であつた。故に斯かる機能社會は既に合成社會より一部分分任せるが如く見らるゝも、二以上の小合成社會の團結に其の基礎を置く以上、是亦合成社會たるものと謂はざるを得ぬ (P. pp. 283-284; D. 506)

合成社會に就いて述べたるが如き事情により、數多の部族は又團結して部族同盟を構成した。同盟の職能は先きに部族に屬したる軍事的採能と氏族に屬したる法律的機能とを、併せ遂行するにあつた。ギディングスは此の合一的職分を政治機能と呼ぶ。蓋しそは内務的統制と外部の折衝とを其の任となせるがためである。法律的機能は部族間又は部族を異にする成員間の係争問題の解決であつた。又團結の弛緩を防止するため個人的復讐を堅く禁じた。斯く軍事的事務に關し、又は立法的及び司法的事務に關して最高權を有するものは同盟合議會にして、そは各部族の族長又は氏族長より成り又其の上に合議會長あり、一人又は數人にして選舉の結果其の職に就いた。茲に於てか始めて主權なるものが發生した (P. pp. 284-285; D. pp. 506-507)

以上見來れるが如く、種族社會に於ては組織社會は殆ど合成社會より分化するに至らず、兩者は常に影の形に添ふが如く、又合成社會を女性とすれば組成社會は男性にして、二者はめをこの如く能く其の間堅き握手が保たれて居た。然るに一度征服國家成立して以來、事態は正に一變した。尤も庶民社會に於ける家政團體は其の構成當初に於ては、種族社會に於けると等しく家族より分化せるものではなかつた。併し乍ら漸次社會の發達するにつれて家政團體は其の機能を放散せしめ、其の放散したる、機能に就いて獨立の結社の成立を見るに至つた。茲に於て學者の所謂社會的錯綜するも、ギディングスは此の點に深く留意する所がなかつた。

庶民社會に於ける合成組成社會としてギディングスの擧ぐるものは、家政團體、地方團體及び國家其の他有意的結社 *Voluntary association* である。家政團體は庶民社會に於ける家長家族により組成せられたるもので、合成社會の家政團體に比しより複雑なる組織を有つて居た。希臘の *oikos* の如き之に屬し、そは後來 *economy* 又 *economics* なる語を派生するに至つた (*D. p. 506*)。

地方團體に就いては今姑く説かず (*D. pp. 508-509*) 直ちに國家に就いて言へば、其の組織の廣大を極むるだけ機能も亦頗る複雑であるが、其の重なるもの、換言すれば其の機能なくして國家なる機能社會も亦存在せざるに至るものは基本的目的に關するそれである。斯かる目的は即ち國家の團結を完全になすことに存し、これがために國家は外敵の防衛及び内國の秩序の維持を圖る。軍隊を組織し外交其の他の行政機關を完備し、又立法及び司法の事務を管掌するは凡て前二つの目的を達せんがためである。此の二つの目的のよりよき遂行を期せんがために、國家は別に附屬的に經驗的及び

文化的機能を行ふ。貨幣の鑄造、煙草、鹽、砂糖の官營、鐵道、郵便、電信、電話の開設維持等は前者に屬し、科學、文學、美術、宗教、教育等の研究又は普及のため諸種の設備を爲すが如きは後者に屬する。然れどもそれは飽迄も基本的目的の如く本來の國家の機能をなさず、唯便宜上然るに過ぎぬ。是等の機能なくも機能社會としての國家は滅ぶるに非ず。故に私は國家の本來の機能如何を問ふ者あらば、そは外敵の防衛及び内部秩序の維持の二に限ると答ふるに躊躇せぬ。故に事情の都合好きものあらば、經濟的又は文化的機能は他の機能社會又之を行ひ得る。試みに現代の社會を通過すれば、國家以外の機能社會は合成社會の成員の間に無限に錯綜して並立する。各種經濟的機能社會、例へば各種銀行、營利會社、產業組合の如き、又種々の文化團體、例へば宗教團體、積善團體、學會、調查會、美術俱樂部、交驢俱樂部等枚舉に遑なし(P. pp. 176-196)

而して是等の機能の特殊化又は異質化に基いて社會的分業が完成せられる。合成社會に於ては常に成員の類似又は同質を維持せんとし、社會の組成 *social constitution* は差異を増進し之を寛恕することによつて成立する(P. p. 196; D. p. 577)。組成社會は斯く差異の並存を宥すと同時に、又相互依存の關係に立つ。蓋し各自の機能が特殊化されたるがために、他に依存して其の補充を覓むるに非ざれば存續し得ざるに至るからである。吾人が既に觀來れるが如く、原始社會に於ては經濟的、政治的又は宗教的活動の間には相互の連絡を缺く。換言すれば有機的連帶 *organized combination* の關係に立たなかつた。狩獵と漁獵と禮拜との間にも亦何等相依の關係が存在しなかつた。然るに機能の放散夥しく相互の差異亦従つて顯著なるに至れば、各機能社會は自から相互補充の關係に立つ事

前述の如くである。

斯く經濟、政治、法律、宗教、教育、交驩と云ふが如く、各々相異る機能を營む數種の組成社會の間に、相依の關係成立するのみならず、又其の間に主従の關係 *subordination* が成立する。本來社會（動物社會も亦）一般の目的は、其の窮極に於て有情者の生活を保護し完成するにある。特に人類の社會に就いて云へば、其の目的は成員の道義的人格を發達せしむる事に存する。然るに此の目的の遂行に直接當り得るものは文化的機能社會あるのみである。教育、宗教、科學、道德及び藝術的結社のみが此の目的の達成に關する機能を行ひ得る。其の他の法律的、政治的及び經濟的機能社會の如きは、此の目的的見地よりすれば、文化團體に従たる地位を持つ。即ち文化團體が此の目的の達成のために一定の機能を營む場合に、之を幫助する立場にある限り、他の結社は存立の意義を有する。若し該目的と背馳する方向に向つて其の機能を行ふ場合、社會意識は之を改廢するに躊躇せぬ。

以上概觀し來れる所によれば、組成社會は合成社會の發達と共に其の機能に複雑を加へ、之を放散せしめ、遂に差異の並存による分業を生じ、社會の相依を來すと同時に、他方に目的の道義化行はれ、社會は皆社會幸福の方向に向つて進む。唯惜むらくは、(ギ氏自身の見解が全く或暗示を與へぬといふには非ざるも) ギディングスが合成社會に就いて見たる發達の到達點を、組成社會に於て明確に示さざりし一點に存する。若し吾人の見解が正當なりとするならば、直截に左の如く斷定し得る。即ち合成社會が人類を包括したる一團としての社會たり得るとせば、そは主として機能の放

散の結果當然生じ得べき社會的錯綜に負ふ。國家を異にする成員間に無限に錯綜の網を織り出し、其の結合の後に殘されたる愛著的結合は、合成社會の成員の間に行はるべき交驩と相俟つて、人類を人類へ直接結び付く。中間社會の之が爲め蒙るべき影響如何は今姑く措いて論せず。

四 將來の社會

既に一縷の暗示を得たる所に基き、更に論歩を進める。社會が一定の發達段階に達する時は、それは成員たる個人の上に反動を興へ、其の性情を變形する。即ち社會は個人をして社會的性情を取得せしめる。社會的性情とは寛容性 *toleration* である。寛容性は忍從し得べき性情のみならず、適應し得べき性質をも含む。換言すれば對面の結合に於ける利他的傾向即ち愛著である。(C. B. 121-122)。如斯く社會は個人と社會適應性を賦與する。利他的活動に於て吾人は其の結果より離れて、行爲そのものによつて満足を得る。尊敬、愛、自己犠牲の如きはそれ自身善なる活動である。これ人格の要素である。故に人格は社會の產物である。然るに斯かる社會の所産たる人格は又社會そのもの、上に反動を興へる。人格は前述の如き要素を含むものとするならば、其の發動によつて他人との結合が緊密に維持せられる。何となれば他人を尊敬し愛著する所自から結合が生るゝばかりでなく、前者強ければ後者又従つて強度を加ふるからである。斯くの如く人格の發達は社會團結の上に影響を興へる。のみならずそは又社會形態の上にも反動するものと謂はねばならぬ。吾人次ぎに其の影響を見む。

社會が發達すると共に成員の活動は思慮的 *reflective* となる。思慮的活動進み愛著する範圍又擴大すれば、社會の發達に著しき影響を與へる。知識が益々深まるにつれ、又思想が愈々普遍的全般となるに従つて、又或ひは人類の要求がより低きよりより高きへと進むに従つて、社會の範圍も亦擴大する。經驗を重ねるにつれて從來の道義的觀念を兩立せざる道義的觀念に逢著する。然る時は舊き觀念は廢れ新らしき道義的觀念之に代る。例へば原始蠻民の傳統的盲信の紐帶が反省的批判によつて破られ畢つたやうに。而もこの道程は幾度も繰述へされる。舊き要求が新たな要求と背馳する以上、思慮的人格は舊きものを突破して進まんとする。而して遂に愛著は其の最後の到達點を得る。世界の人類總てを包擁し得る愛はより小さき中間社會を解體せしめて平面に浮び出る而してこれを主として幫助するものは文化的機能社會である。蓋し此の種の社會の機能は思慮的人格を創造發達せしめ、人類への愛に目醒ましむる唯一の源泉をなすからである。斯くして遂に全人類の包括的一大社會が生れ出る (P. p. 360, Book IV *passim*)。